http://www.jwn.ne.jp/chunichi/saigai/

毎月1日は東海地震特集

# 備える

## その9「三つ子地震」

# 高まる同時発生の恐れ

太平洋戦争の戦中と終戦後に甚大な被害をもたらした「東南海・南海地震」は、今世紀前半の発生が懸念されている。中央防災会議は昨年末、二つの地震が同時に起きた場合、最大約七千四百人が死亡するとの想定を発表した。「あす起きてもおかしくない」と言われる東海地震と、同時発生が懸念される東南海・南海地震。しかしこれらの巨大地震が別々にやってくるとは限らない。そもそも東海地震はこれまで単独で起きたことはないからだ。

駿河湾から遠州灘、紀伊半島の潮岬沖を通って四国・足摺岬沖の海底に延びている南海トラフ（溝）沿いに起きる三つの巨大地震は、百―百五十年の周期で、分かっているだけで過去千三百年に十回余り発生している。

四国や紀伊半島が乗っている陸のプレート（岩板）の下にフィリピン海プレートが潜り込み、陸のプレートを下方に引きずり込みながら沈下。ひずみが極限に達したとき、元に戻ろうと陸のプレートの先端が跳ね上がり、巨大なエネルギーが放出されて地震が起きる。これが海溝型地震の仕組みだ。

だが、そもそも東海地震が単独で起きた例は古文書や地層研究で分かっている限りはない。

二万人に上る犠牲者を出した一七〇七年の宝永地震は、駿河湾から足摺岬沖まで数時間差でほぼ同時発生した。一八五四年の安政地震は、駿河湾―潮岬沖を震源とする〝東海地震〟の三十二時間後に南海地震が発生するなど、過去には三つの地震が同時か、接近して起きてきた。断層が連続しており、一つが動くと隣も動きやすいからだと言われている。

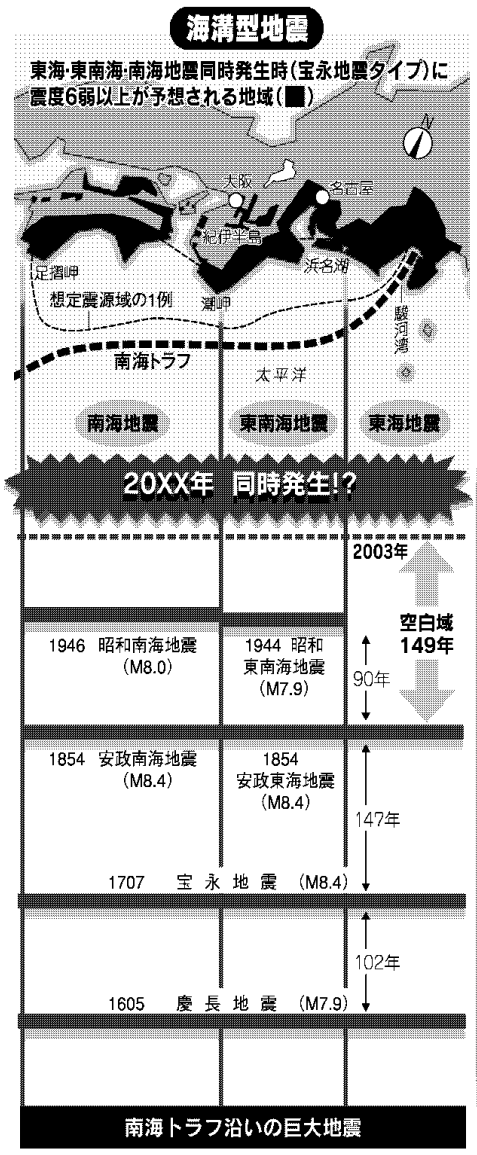
ところが、一九四四年の東南海地震は、なぜか震源域が浜名湖沖にとどまった。大地震が起きると、長年にわたって地下の岩石に蓄積されたひずみが一気に解放されるが、駿河湾から浜名湖沖の一帯は取り残された。その結果、安政地震から現在まで約百五十年間のひずみがたまっている。これが、「あす起きてもおかしくない」といわれる東海地震説の根拠となっている。

一方、東南海、南海地震が起きてからも五十年以上が経過。文部科学省の地震調査研究推進本部は一昨年、三十年以内の発生確率は、東南海が50％、南海が40％と予測しており、東海と同時に発生する可能性も日を追うごとに高まっている。

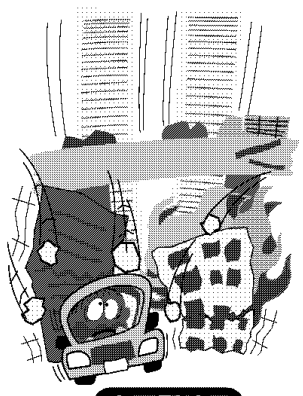
前々回の安政地震のマグニチュード（M）8・4に対し、前回の昭和東南海・南海はM7・9―8・0と、規模が下回った。中央防災会議の東南海・南海地震専門調査会委員も務める安藤雅孝名古屋大教授は、過去の地震のデータを分析し「規模が比較的小さいと、次の地震までの間隔が短くなる」と指摘、このことも三つの地震の同時発生の可能性を示唆する。

安藤教授は「三つの地震を連動させた対策と観測網の整備を急ぐべきだ」と提言している。

東海地震に比べてこれまで対策が遅れてきた東南海・南海について、新年度から観測網が強化される。今夏には、重点的に対策を取ることが必要な推進地域が指定される見通しだ。



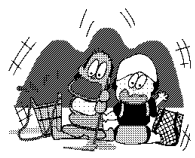

※中央防災会議の資料に基づき作成　構成＝デザイン課　森川敏朗



**直下型地震**

南海トラフ沿いの地震前後に起きた中部地方の内陸地震

1961　北美濃地震（M7.0）
1948　福井地震（M7.1）
1945　三河地震（M6.8）
1909　姉川地震（M6.8）
1854　安政伊賀上野地震（M7.3）



1662　寛文地震/滋賀（M7.2～7.6）
1596　慶長伏見地震/京都・滋賀（M7.5）
1586　天正地震/岐阜・愛知（M7.8）

## 100―150年周期 断層連動

## 『東海』単独 過去に例なし

## 直下型は前触れ!?

## M7級が前後に集中

過去の地震の記録をみると、南海トラフ沿いの海溝型地震の前後に、直下型の内陸地震が頻発している。

一八五四年の安政地震の約半年前、三重県で伊賀上野地震が発生。昭和の東南海・南海地震の前後には愛知県で三河地震、福井県の福井地震などM7クラスの地震が起きている。

直下型地震は千年以上の周期で起きるのに対し、海溝型は百―百五十年周期で起き、規模もM8程度と大きい。マグニチュードは1大きくなると地震エネルギーは約三十倍になり、2大きくなるとその二乗で約千倍になる。

海溝型地震と内陸地震が連動して起きる仕組みははっきり分かっていないものの、巨大な海溝型地震の前に内陸での地震活動が活発化。海溝型地震の発生後もしばらく内陸直下に地震を引き起こしていることは歴史が物語っている。

過去に東海地方を襲った地震について調べた鈴木康弘愛知県立大助教授は「南海トラフ沿いの海溝型地震の三十五年前から十年後にかけて、東海地方を含む西日本に直下型地震が続発している」と指摘する。

そう考えると、一九九五年に起きた阪神大震災（M7・3）、二〇〇〇年の鳥取県西部地震（同）も、近づく東海地震、あるいは「三つ子地震」の前触れととらえることもできる。地震への備えが必要なのは太平洋沿岸部だけではない。

史上最大規模の一つ」などと大きく報じたものの、三菱重工業名古屋航空機製作所（現名古屋航空宇宙システム製作所）などの軍需工場が壊滅的な打撃を受けたため、被害は国家機密となった。正確な資料はほとんど残っておらず、被害規模は調査によって異なる。

東南海地震の体験談を集めている名古屋工業大の谷口仁士教授（地震工学）は「体験談は地震被害を知る唯一の手段。昔の人は行政に頼るのではなく、自分の身は自分たちで守っている。特に若い人に地域や企業を自分たちが守るという意識を学んでほしい」と話す。

同教授の研究室は＝電052（735）5204。

## うなる地面 町が消えた

### 「東南海」体験者は語る

### 津波…『とにかく逃げろ』

漁村に突然、「ゴオー」と不気味な音が響いたのは、一九四四（昭和十九）年十二月七日、午後一時半ごろだった。

リアス式海岸の湾奥に家屋が密集する三重県紀勢町錦。天然の良港に恵まれるものの、三方を急しゅんな山に囲まれたすりばち状の地形は、古くから津波に弱いと言われていた。

敗色濃厚の戦中のことだ。「B29が来たぞ、伏せえー」。近くの山で、仲間と飛行服の綿にするススキの穂を集めていた当時十三歳の坂口貴也子さん（七）は、そんな叫び声を聞いたことを覚えている。その直後。足元がグラ、グラッと大きく揺れた。

「あんごうよ（ばかもんの意）。津波が来るで」と、擦れ違う人に怒鳴られながら、とっさに海辺にある自宅に駆けつけた。「サツマイモを持ち出さないと」。食糧難の戦時下。津波より食べ物の心配が先走った。イモを手に高台に逃げた。家はその後、津波に流された。

波はすさまじい音とともに多くの家をなぎ倒し、引いていく時には一瞬、海の底が見えた。

坂口さんは「あのときは命拾いしたが、津波が来るのが分かっていたら、とにかく体一つで逃げるのが大切」と今、振り返る。

町によると、三重県南部には津波が十九分で押し寄せた。紀勢町錦では高さ六・五㍍に達した。同地区の死者・行方不明者六十四人。住家は約八百戸のうち七割近くが流失、全半壊した。

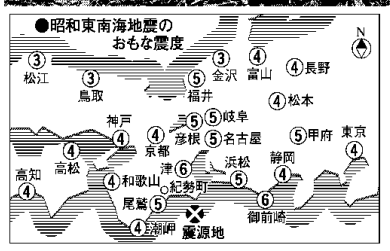
### ■工場も倒壊

「家の下敷きになる」―。名古屋市昭和区松風町の御器所小学校横にあった自宅で、寝込んでいた当時十九歳の生け花師範、森栄子さん（七七）は、体験したことのない恐怖に震えた。夢中で毛布をつかんで裸足のまま、母と姉と外に飛び出した。

揺れは横にゆっくり、大きく、少なくとも一分程度続いたという。早く逃げようと必死に足を踏みしめてからも、揺れは続いた。近くの家々がきしむ音が重なって「ウワーン」と地鳴りのように響いていた。

東南海地震の体験談を集めた「恐怖のM8」（一九八三年中日新聞社刊）によると、当時名古屋市南区にあった三菱重工業名古屋航空機製作所や鉄柱、がれきが四、五㍍も山積みになっていた。「苦しい」「助けてくれ」とあちこちで悲鳴が上がり、通路は避難する数百人が立ち往生した。同工場だけで死者は約六十人に上った。

▲昭和東南海地震でガレキの山と化した三菱重工道徳工場―1944年、名古屋市南区で




### ■乏しい資料

文部科学省の地震調査研究推進本部などによると、昭和東南海地震の発生は午後一時三十六分だった。熊野灘を震源域にマグニチュードは7・9。津市や御前崎で震度6、名古屋、岐阜、彦根、福井などで震度5を記録した。

死者・行方不明者は、愛知四百三十八人、三重四百六人、静岡二百九十五人、岐阜十六人など計千二百二十三人。名古屋の犠牲者は港区、南区など市南部に集中している。

欧米の主要紙が「観測

© 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。